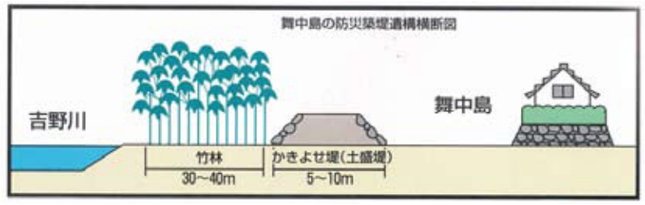
風土から生まれた民家のカタチ

県北部には日本三大暴れ川の一つである四国三郎の異名を持つ吉野川が西から東へと流れ、河口付近では川幅1キロを超える大河となって紀伊水道に注いでいる。この暴れ川は昭和の初めに堤防が整備されるまで、台風襲来の度に氾濫し田畑や家屋を呑み込んでいた。藍作の盛んだったこの地では、上流の肥沃な土を運んでくれる洪水は連作の難しい藍にとっては歓迎すべきもので、農民たちは洪水と共生する道を選んだ。その名残りの一つが竹林で、植林面積は日本一だという。これによって洪水の勢いを弱め、浸水しても家屋は流されないのだ。またお城のように高く築いた石垣の上に建てた家屋も点在している。
一方、吉野川流域の街道沿いにはうだつを上げた商家が、国の重伝建保存地区に指定されている脇町を初め、池田町や貞光町に残っている。 延焼防止のためのうだつではあるが、藍や煙草で繁栄した証しでもあり、その凝りようは見応えがある。
県南部の海岸沿いは台風常襲の地であり、民家は「ミセ造り」と呼ばれる雨戸を備えているものが今も残っている。これは上下に開閉する形式なので強風でも外れにくく、普段は縁台として利用している。風土から生まれたカタチが漁村のまちなみを個性豊かなものにしている。
風土から生まれた民家のカタチに学ぶことは多い。東日本大震災を目の当たりにして、その思いがより強くなる。普段はやさしい自然だが時に牙をむく。厳しい自然との付き合い方を昔の民家から読み解きたい。

舞中島（航空写真）

洪水と共生する「舞中島」

「舞中島」は、吉野川の中流域に位置している、北を吉野川、南をその支流である明連川によって挟まれた中島である。
近世の阿波では、藩の政策として藍の生産を奨励しており、吉野川流域では盛んに藍が生産されてきた。中でも藍生産に適した土地である舞中島は、石井町の藍畑や板野郡の藍園と並ぶ藍の主要産地の一つであった。そのため洪水被害に頻繁にあう土地でありながら、藍の生産のために人々は居住し続けた。
現在残る高石垣の住居はほとんどこの頃に建てられた。石垣には主に徳島特産の青石が使われた。それぞれの住居や、基礎の石垣が豪壮であることから、藍生産による収入が豊かであったことを想像させる。また、島の周囲に見られる竹林や、かきよせ堤もこの頃に整備されたものである。
家を高くし、竹林をめぐらし、舟を備える‥
それは、自然と共生するために生まれた川の文化である。
そしてそこには、氾濫する川と共生しようとするたくましい庶民の知恵が隠されている。



高石垣の住居

災害由来の建築としての「うだつ」

「うだつ」とは、切妻屋根の隣家との間にある2階壁面から突き出した袖壁である。町屋が隣り合い連続して建築されている場合、隣家からの火事が燃え移るのを防ぐ目的がある。明治時代以降には、財力の証・富の象徴として装飾性を帯びたものとしてつくられるようになった。
徳島において「うだつ」は江戸時代から明治時代中期にかけて、吉野川流域で多くつくられた。現在でも、脇町・貞光・池田・半田・井川で「うだつのまちなみ」が残っている。
脇町は、鎌倉時代以降に商家町として発達し、藍の集積地・積み出し港として栄えた。南町では東西430mの通り沿いに「うだつのまちなみ」があり、宝永年間(1704~10)から明治・大正時代の町屋が90軒近く残されている。地形による恒常的な水不足により、しばしば「大火」に見舞われ、文政12年(1829)には北町・南町で約170軒を焼失している。その為、意匠的に凝った寄棟型の「うだつ」をあげる町屋の多くは明治以降に建築されたものである。
また、貞光は江戸中期以降にタバコの集積地として脇町と並んで二大商業地を形成していた。一字街道沿いに「うだつのまちなみ」があり、脇町のような統一的な「うだつ」とは異なり多様な形態がある。二段に屋根をかけた「二層うだつ」や、壁面に漆喰の彫刻をしたものである。
このように「うだつのまちなみ」は【防災としての建築】から【芸術としての建築】へと移行した歴史的背景がある。

うだつの街並（貞光）

漁村の街並

県南漁村の「ミセ造り」のまちなみ

県南の漁村集落を歩くと通りに面して濡れ縁（縁台）のある民家がやたら目に飛び込んでくる。これが地元では「ミセ造り」とか「ブチョウ（部帳）」と呼んでいるもので、折り畳むと雨戸になる機能を兼ね備えた優れものの板戸なのである。
軒を寄せ合うように建つ漁村集落には常に温かいものが感じられて何ともほほえましいのだが、漁家一軒の間口は二間ほどと狭くしかも奥に長く、光や風の取り入れにくい、いわゆるウナギの寝床の形をしている。通り面から射し込む貴重な光や風をできるだけ奥まで届けるには、雨戸（戸袋）といえども邪魔になる。そこで考え出されたのがこのミセ造りなのである。
かつて魚の行商で大阪や京都まで足を運んでいたという。京の「揚見世（あげみせ）」と出会い、雨戸にすることを思い付き、台風常襲地の風土に合わせて造り変え、真ん中から上下に開く雨戸を完成させたのである。上の板戸は上ミセと呼び軒下に納め、下の板戸は下ミセと呼び二本の脚で支えて縁台になる。
狭い通りを挟んで向かい合った縁台は、語らいの場となり、コミュニケーション装置としての重要な役割を担っているように見える。
しかし、時代の流れには勝てず、いまミセ造りのまちなみとしての雄姿を留めているのは、牟岐町出羽島と海洋町鞆浦集落だけになった。

ミセ造り

徳島地域会名簿（五十音順）

青木 稔	佐藤 博	間 健治
石原 隆昌	島田 英明	埴淵 隆
伊月 善彦	鳥羽 知夫	原 政仁
井上 眞司	富田 眞二	古谷 信一郎
内野 輝明	中川 俊博	平島 弘之
岡島 滋憲	中野 次郎	松田 公彦
喜多 順三	新居 照和	山口 利夫
久住 高弘	野々瀬 徹	